

## 日本放射線影響学会第 58 回大会・ICRR2015 同時・共同開催を行って 富山大学大学院医学薬学研究部放射線基礎医学講座

近藤 隆

ICRR（国際放射線研究会議）2015 の開催が決まって、同じ年の日本放射線影響学会をどのように開催するかが議論された。また、その大会長を誰が引き受けるかも問題となった。私も当時の富山医科薬科大学に赴任して 18 年が経ち、退任までに影響学会大会開催の依頼があれば、自身の研究基盤となってきた学会であり、恩返しの意味でも引き受けざるを得ないとの思いはあった。2015 年の影響学会大会の開催の在り方については 2012 年頃より、議論され始め、2013 年 4 月 12 日の評議員会審議で同時共同開催が決まり、続く 5 月 13 日の審議で、小生がその大会長に就任することが決まった。その後、2013 年 7 月 21 日の幹事会と青森で開かれた第 56 回大会時の 10 月 17 日の評議員会で報告された。いつだったか、当時の宮川 清学会長より、電話をいただいたことを覚えている。第 58 回大会を ICRR2015 同時開催として行うので大会長を引き受けてもらえないかとの依頼であった。実のところ影響学会の同時共同開催の具体的なイメージはなかったが、2012 年に京都で国際ハイパーサーミア学会と日本ハイパーサーミア学会が同時開催され、後者の大会長を引き受けたこともあり、この経験を生かせるかとの思いで、二つ返事でお引き受けした。

さて、実際に動き始めてみると、問題が生じてきた。共同開催とはいえ、影響学会独自の企画を行うかどうかである。これに関しては、若手会員の参加を促すための施策も含めてアンケートを行うこととした。その結果、やはり、福島原発事故に関わるシンポジウム開催の要望が多く寄せられた。丁度、4 年を過ぎ、多くの調査結果も出揃う、まさにタイムリーな企画と思われた。この立案に関しては、広島大学名誉教授であり、また、富山大学客員教授にもなっていた鈴木文男先生に影響学会大会の実行委員長（その後 ICRR2015 の事務局長代理に就任され本大会の運営にご尽力いただいた）をお願いして、充実した案ができ、第 4 回プログラム委員会に諮ることとした。しかし、その会では広島大学が中心となり、オールジャパン体制でシンポジウムを企画することになった。その後、多くの企画案が出て、気が付くと大会期間中のシンポジウムを行う空枠もなくなってきた。元来、影響学会会員としての発表は一般講演として演題を提出することであったので、独自のシンポジウムの開催は断念し、プログラム上の空き時間を利用して、特別企画として、日本放射線影響学会長講演と今年度の受賞講演を入れ込み、総会、授賞式、平成 26 年度受賞講演等の学会関連行事は時間的制約の少ない、最終日の閉会式後に行うこととした。学会賞講演では島田義也会員が、奨励賞で廣内篤久会員、また岩崎民子賞で保田隆子会員による質の高い講演が行なわれた。会長講演の演題は[Attracted to Radiation Biology: From Thorotrast to the Future]であり、福本理事長にご無理を願い、影響学会に関する歴史的紹介もお願いした。

今一つ問題となったのは、日本からの一般演題発表数である。今までの国際放射線研究会議でも日本人参加者数の中で影響学会会員の割合は高く、本邦での開催では特に影響学会への期待は大きなものがあつた。但し、通常の国内での学術大会と時期も異なり、登録費の高さもあり、若手会員や学生の発表数の減少が懸念された。後者については、アンケートの要望もあり、登録費の減額を行うこととしたが、演題募集のアナウンスがされても、出足が鈍く、先行きが相当に危ぶまれた。そのため、背に腹は代えられず、ICRR2015 の日本での 36 年ぶりの開催の意義、日本の放射線研究のプレゼンス発揮する重要な機会である

点を訴え、昨年の11月には殆ど毎日、関連する放射線関係の研究室に電話で演題提出を依頼した。多くの協力と支援をいただき、予定数が300演題に達した日、やっと先が見え安堵感を覚えたことを記憶している。

最終日の閉会式等も参加者数が少なくなることが心配されたが、会場とプログラムの構成の工夫で極めて充実した秀逸の内容となった。その後、平成27年度日本放射線影響学会総会、同授賞式、平成26年度日本放射線影響学会授賞講演（学会賞：近藤 隆会員、奨励賞：横田裕一郎会員、奨励賞：中村麻子会員、岩崎賞：柿沼志津子会員）が行われ、多くの関連集会も含めて、影響学会関連行事がすべて終了した。ひとえに国際学会と言っても、その招致は一筋縄ではいかず多くの先人の努力と長期的戦略が必要である。東映映画村で出会った、“水戸黄門”のご出身は、姫路とのこと。かの軍師 黒田官兵衛の出身地でもあり、そのDNAを受け継がれたと思うと日本へのICRR誘致戦略の成功術も合点がいく。今まで長年にわたり招致活動に尽力されてこられた各位に改めて感謝申し上げたい。また、国際学会の開催には長い間の準備が必要であるが、直前の作業には並々ならぬ労力が必要である。現地で、これらを実施された平岡真寛大会長はじめ教室関係者の獅子奮迅の活躍に心より感謝申し上げる

## 一般社団法人 日本放射線影響学会 放射線ワークショップ（第1回） -未来に繋ぐ放射線研究-の開催にあたって

本邦で36年ぶりに開催された第15回国際放射線研究会議(平岡真寛大会長)は最終的に2,016名の参加を得て、盛会のうちに終えることができました。ここで得られた情報を如何に未来に繋げるかが、特に次世代を担う若手研究者、そして日本放射線影響学会にとって重要かと思えます。以前より、秋に本学会の若手および学生会員の成果発表の機会を設けて欲しいとの要望がありましたので、この放射線ワークショップ-未来に繋ぐ放射線研究-の開催をお世話させていただきます。今回、原則、会場は一つとして、参加者が一堂に会して、聴く形をとり、発表は口演のみといたします。この機会に、分野の異なる研究者の情報交換が進むことを期待しております。是非、魅力ある研究成果を凝縮した形で、ご発表いただければ幸いです。

さて、本ワークショップ開催に際して、特別講演とランチョンセミナーを企画いたしました。

特別講演には京都大学名誉教授の小松賢志先生に「NBS1 発見物語」としての講演をお願いいたしました。なぜ、先生がこの分子に興味を持たれ、世界的研究成果の発表まで至る道程は、特に若手研究者には、学ぶところは大きいと思えます。ランチョンセミナーでは、男女共同参画に関わる話題提供を本学の担当学長補佐であり、小児科医師でもある市田蒔子先生にお願いし、今一つはアクセプトされる研究論文の書き方について、Oxford University Pressにお願いしました。これからの放射線科学を背負う若い研究者にとって、男女共同参加社会を創造し、恒常的に研究資金を獲得して、質の高い研究論文を発信していく、一連の過程は極めて重要となります。

また、放射線ワークショップ終了後は、同一会場ですが、市民公開シンポジウム「放射線と人との係わり合い-未来に繋ぐ放射線影響研究とその展望-」(平成27年度富山大学学長裁量経費支援事業:全学一体で取り組む安心・安全のための放射線研究と大学からの情報発信)を開催します。本学では福島原発事故以後、大学からの放射線に関する情報発信に務め、第8回目の事業となります。ご都合よろしければ、是非、このシンポジウムにもご参加いただければ幸いです。

今春、北陸新幹線が金沢まで延伸して、首都圏とのアクセスは各段によくなりました。また、この会の開催時期は富山の魅力を堪能できる最良の季節と存じます。富山は世界遺産の五箇山をはじめ、世界的観光地である立山、黒部への起点となります。この機会に観光と北陸の幸を存分に味わっていただければ幸いに存じます。

それでは、富山開催ならではの有意義な会になるよう事務局一丸となって努めてまいりますので、関係各位のご支援をお願い致しますとともに、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

平成27年10月吉日  
ワークショップ世話人；大会長：  
富山大学大学院医学薬学研究部放射線基礎医学講座  
近藤 隆  
事務局一同